

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 黄立芸

本論文は、明代第一の花鳥画家とされる宮廷画家呂紀の代表作「四季山水図（四幅）」（東京国立博物館）を中心に、日中花鳥画の比較研究を行おうとするものである。

本論文は、第一・第二章と第三・第四・第五章の二つの部分からなる。花鳥画の重要な素材である鳥の型について、ある型がどのような鳥類にも共通に用いられる「超類型化」現象を指摘する、鈴木廣之氏や、正倉院南倉宝物の「草木鶴図漆櫃」に六鶴を画く作例が、「六扇の鶴様」を創始した初唐の薛稷の型によるものであることを明らかにするとともに、五代の黄筌に継承され、一部改変された六鶴の新たな型が中国のみならず、日本にも波及したとする、小川の先行研究などを踏まえつつ、日本や中国・韓国に現存する唐代の「紫檀槽琵琶 捍撥 鷺鳥水禽図」（正倉院南倉）や「唐懿徳太子墓墓道 鷹匠図壁画」（陝西省乾県）、朝鮮王朝の李巖「架鷹図」（日本民芸館）、江戸時代の「架鷹図屏風（六曲一双）」（岡山県立博物館）などの作例や、杜甫「楊監又出画鷹十二扇」（『杜工部詩集』巻六）などの失われた作例を踏まえる文献を駆使して、当の楊監が杜甫に見せた、様々な型による架上の鷹を画く唐代の馮紹正「架鷹図屏風（十二扇）」の復元的考察を試みる。北宋・黄居寀「山鷓棘雀図」（台北故宮博物院）における雀のように、当の黄筌の子黄居寀自身が確立した六鶴の型に基づいて、「唳天」「顧歩」「警露」の型を取る雀など、より一般的な鳥で行われる型の組み合わせ方を追究するのが、その第一の部分である。

第二の部分は、呂紀「四季花鳥図（四幅）」に即して、この作品の詳細な造形的分析を試み、その影響を探ることが中心となる。その前提として、作者の呂紀に関する文献的考察を行い、最も早い時期の李堂（1462—1524）「郷先生遺事〔呂紀伝〕」『堇山文集』（巻十五）などに基づいて、その生年が1430年代であり、『明実録〔孝宗実録〕』弘治十七年（1504）に子の泰が画院の職を継承するとあることから、卒年は1504年以前とする。「四季花鳥図（四幅）」それ自体については、北宋時代に完成した透視遠近法に基づき、画面ほぼ半ばの高さに水平線を設定し、それより上の後景の対岸、下の中前景の水面と此岸に奥行を分割しつつ、春景から冬景を通して、此岸と対岸を置き、四幅のうち、春景の此岸の右端と冬景の対岸の左端、及び夏秋景の中央左右に立つ岩石と、それに絡む四季折々の花木を配する、対称性を重んじる画面構成や、花木に留まり水面に遊ぶ鳥、花木に寄り添う四季折々の草花の配置について逐一記述する。そして、そのような画面構成が、雪舟「四季花鳥図屏風」（京都国立博物館）や殷宏「絶壑聚禽図」（キンベル美術館）などにも認められることを指摘し、本作品を北宋時代以来の中国伝統絵画の正統に位置づける。

惜しまれるのは、前半の鳥の型と後半の季節の巡行との考察が呼応し合っていないなど、論文全体の紐帯を欠く点であるが、前後半の考察のみでも高く評価することができる。

審査委員会は、以上の点から、本論文が博士（文学）にふさわしいものと思量する。